

那覇市の古墓調査2 一項氏の墓の内部構造一

大湾 ゆかり

The 2nd investigation report of the old tombs in Naha-city;
about the structure inside of the Kou-uji tomb

Yukari OWAN

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第11号別刷

2018年3月30日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.11

March, 2018

那覇市の古墓調査2 一項氏の墓の内部構造¹⁾

大 湾 ゆかり¹⁾

The 2nd investigation report of the old tombs in Naha-city;
about the structure inside of the Kou-uji tomb

Yukari OWAN¹⁾

はじめに

那覇市の都市計画では、市街地に点在する墓地を公園化し、増え続ける人口と墓の需要に対処するため新に納骨堂等を建設して集約化を図ろうとしている。これらの計画の一環で、近年那覇市の中心市街地にある古墓群が撤去されることになり、数年前から墓の持ち主達によって遺骨を移して墓を明け渡す作業が始まっている。

そのようなことが影響して、墓の移転時に遺骨を入れていた厨子甕（蔵骨器）²⁾を寄贈したいという申し込みが当館に複数寄せられている。そこで、当館では墓開きの日に同席させていただき、遺骨を移葬する際に墓の内部と厨子甕の配置等を調査し、厨子甕の中でも特徴があるものを寄贈していただいている。昨年度は、2016年の11月末までに移転することになっていた那覇市の中心部分の墓地で、期限間近の10月に行われた2箇所の墓開きの日に現地を訪れ、調査させていただいた。

本稿では、その中の1つである項氏砂辺家の墓の内部と、厨子甕の配置状況、及び寄贈を受けた石厨子について報告する。

1 那覇市の都市公園整備推進計画の状況

那覇市の墳墓の状況については、昨年度の報告中で触れたので割愛するが、平成27年度から5カ年計画で実施中の「那覇市都市公園整備推進計画（防災・安全）」（以下、「公園化計画」と称す。）について、少し触れておきたい。

那覇市のホームページで公表されている公園化計画によると、同事業の目標は、「良好な地域環境の形成、自然環境の保全、災害時における緊急避難地の確保等、快適で安全で安心した都市環境を提供するとともに、公園利用者の利用利便性を向上させる。」こととある。公園整備が進められている場所は22箇所あり、そのうちの数カ所が元々墓地となっていた場所である。例えば、天久緑地7.9haや緑ヶ丘公園3.6haなど、大規模な墓が建っている区域も公園計画に組み込まれたことによって、墓の移転を余儀なくされている。前回報告した與那嶺家の墓もその一つであった。

今回報告する項氏砂辺家の墓は、公園整備計画の区域内にあることから、2016年11月末までに明け渡し契約が結ばれていた。そのような中、砂辺門中のご当主から墓開きの知らせが入り、それを見学させていただくことになった。当日、墓開きの時間に合わせて同家の門中墓を訪れて供養の儀礼を見学し、と同時に、墓室内や厨子甕の調査等を行った。この日は、当館の田名館長と那覇市歴史博物館の鈴木学芸員が参加し、墓内にあった厨子甕の銘書の判読をも行った。また、後日再び訪れ、墓室内の簡易測量を実施したので、その結果や砂辺家の家譜等との照合結果等の情報を互いに共有した。

2 調査の概要

砂辺家の門中墓は、那覇市牧志南公園0.37haの区域にある。ここは、那覇市の中心部にありなが

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan

²⁾ 「厨子甕」という名称については、厳密には家型や御殿型の厨子も多いため、甕を付けずに表記すべきとの意見があるが、本稿では便宜的に旧来の蔵骨器全般を指す場合は「厨子甕」と称することにする。

ら、一步中に入ると大木が生い茂る静かな丘陵地である。

今回報告する門中墓は、一世松香を祖とする項姓(氏集19番No.2458)の祖先十数代が葬られている墓である。一帯の都市開発で移転することになっていたため、2016年10月8日、骨を移葬するために墓が開けられた。

まず、寺の住職による供養の儀礼が行われ、その後、墓口が開けられて墓室内と厨子甕の配置を調査。その結果、ご当主の砂辺松博氏の記録によると、墓室は左右2室に分かれ、左右あわせて59基の蔵骨器が確認された。中には割れたものもあったが、ほとんどが良好であり、いずれも遺骨が入った状態であった。蔵骨器の種類は、家型の石厨子が2基あり、残りはボージャーやマンガン釉がけの厨子、または骨壺であった。厨子甕の調査はこの後10月12日にも行い、後日、石厨子の搬出や墓室内の測量等も行った。

以下、調査の概要である。

(1) 10月8日

同家の墓開きは朝10時から行われた。博物館からは田名館長と筆者2名が参加し、10時前に墓に到着。すでに親族の方々が約20名集まっていた。

この墓は、石灰岩状の岩を掘り込んだ、いわゆる堀込墓(フィンチャー墓)で、墓口は左右に2箇所あり、中で仕切られていた。墓庭はかなり広く、周囲は石灰岩やセメントで囲われていた。

墓開きは、10時に天界寺の住職による閉眼供養の読経から始まった。厳かな雰囲気の中、経文の声と風の音だけが静かに響き、最後に全員で拝礼して儀礼は終了した。つぎに、向かって右の墓(以下、「墓A」と称す。)から、当主が墓口の門石をバールでこつこつ2度たたき、これから墓を開けることを知らせた。そして、墓処理の専門業者が門石を撤去し、いよいよ墓の内部が開かれると、安全を確認したうえでご当主が墓内部に入り、厨子甕の位置をスケッチするなどご自分で調査された。また、同席した田名館長も内部に入り、厨子甕の銘書等を調査された。

向かって左の墓(以下、「墓B」と称す。)も同様に開かれ、調査が行われた。

この後、厨子甕を1基ずつ墓庭に出し、ガムテープを巻いて番号をふり、写真撮影及び銘書の判読作

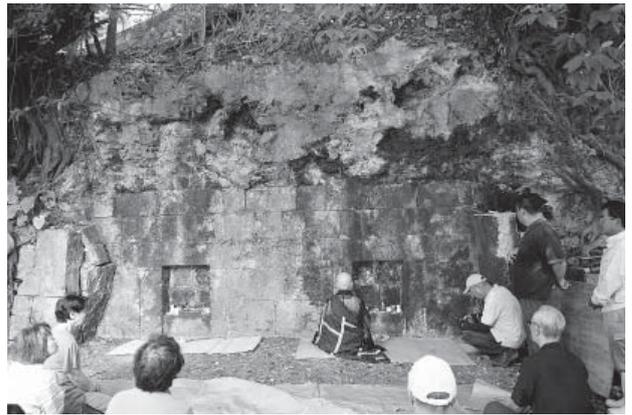


写真1 墓開きの儀礼

業を行った。そうして、甕の内部の骨を1基ずつ移していった。銘書の判読は、那覇市歴史博物館の鈴木悠学芸員と田名館長が行い、砂辺氏からは写真とビデオ撮影をしていた。後に、砂辺松博氏から筆者は家譜のコピーや図面など、いろいろな資料を提供していただいたが、自分たちの墓の記録を残そうと綿密に記録を取られていた氏の姿に感銘をうけた。



写真2 ご当主による墓開きの合図



写真3 向かって右(墓A)の墓室内



写真4 向かって左（墓B）の墓室内

こうした調査によって、墓Aの墓室内には25基、墓Bには34基の蔵骨器を確認。厨子甕は、そのほとんどがボージャー厨子かマンガン釉がけの厨子であり、棚の前方には陶器製の火葬用骨壺が見えた。また、墓Aの奥の段には、家型の石厨子が2基並んでいた。この2基の厨子には珍しい銘書が観察され、この墓の中ではもっとも古い年号が確認できた。そこで、これらの2基については、今後研究素材としても活用できるので、当館へ寄贈していただくことにした。

(2) 11月10日

石厨子2基の搬出作業を実施。両方ともかなりの重量物であったので、業者に委託し専用の担架を作り、墓処理の業者立ち会いのもと、取り出して搬出した。墓口もぎりぎり通せるほどの大きさで、道路までの道も狭くて坂になっており、担架の担ぎ人達も必死である。大人4人がかりでようやく車に乗せることができた。

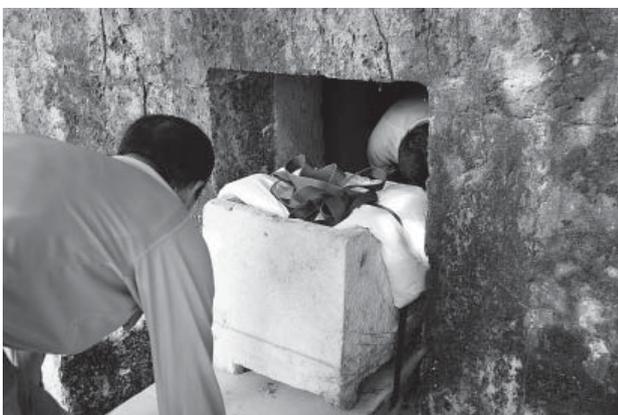


写真5 石厨子の搬出（墓口から慎重に出す）

博物館へ運んだ石厨子は、軽く内部を洗浄し、泥などを除去した後、乾燥し、測量や銘書の調査等を行った。その折に、1基からガラス玉4つが収集された。

(3) 11月25日

再度同家の墓を訪れ、墓室内部の測量を実施。墓処理の業者は、厨子甕を細かく割って墓室に戻す作業を行っていた。この日は、筆者と当館職員2名で墓室に入って測量。後日その記録をもとにして簡易の図面を作成した（図1～3）。

3 墓の概況

この墓は、墓庭の面積が28㎡ほどあり、墓本体は3m以上ある岩盤を利用した掘込墓である。岩盤の表面は2mほどの位置まで垂直に削られ、2つ墓口が設けられている。墓の内部は、墓Aの天井高が134cm、墓Bが140cmで、奥行きは墓Aが370cm、墓Bが345cmであった。両方とも棚が2段あり、1段目は高さ11cm～16cmとかなり低くて奥行きがあるが、2段目は40cmほどの高さで奥行きも短い。1段目は左右の袖側も広く、たくさんの厨子甕が置ける構造になっているという特徴があった。

この墓AとBの間は、石積みの壁で仕切られている。壁は石の間を漆喰等で補修していたが、一部の壁面は崩れかけて危険な状態であった。真ん中の壁以外は岩盤を掘り込んだものであったので、おそらくこの墓を使用するときに仕切り壁が作られたものと考えられる。



写真6 墓AとBとの間の壁

砂辺氏の話では、左右の墓室で直系と傍系の家の遺骨を分けているとのことであった。しかしながら、

全体図

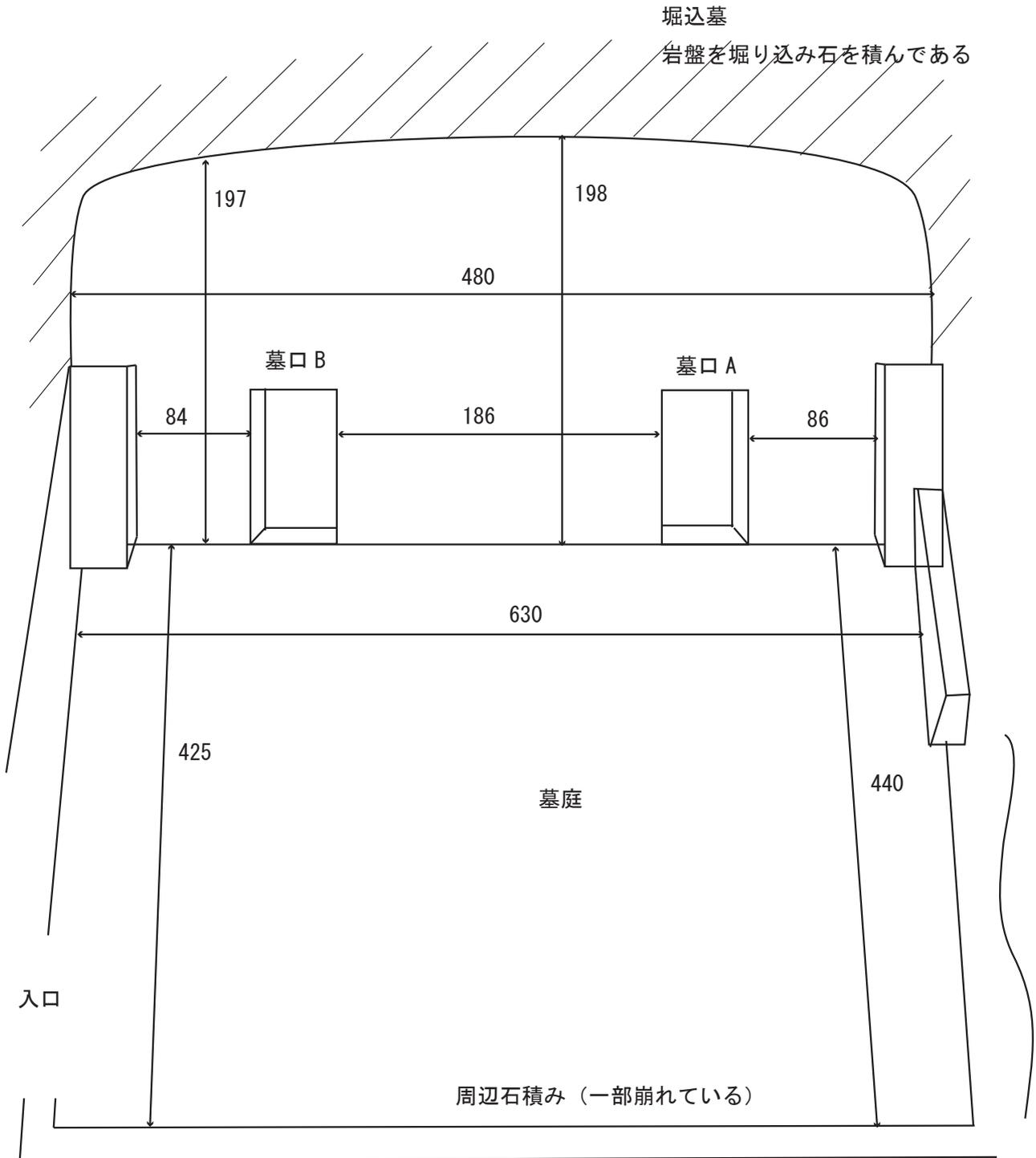
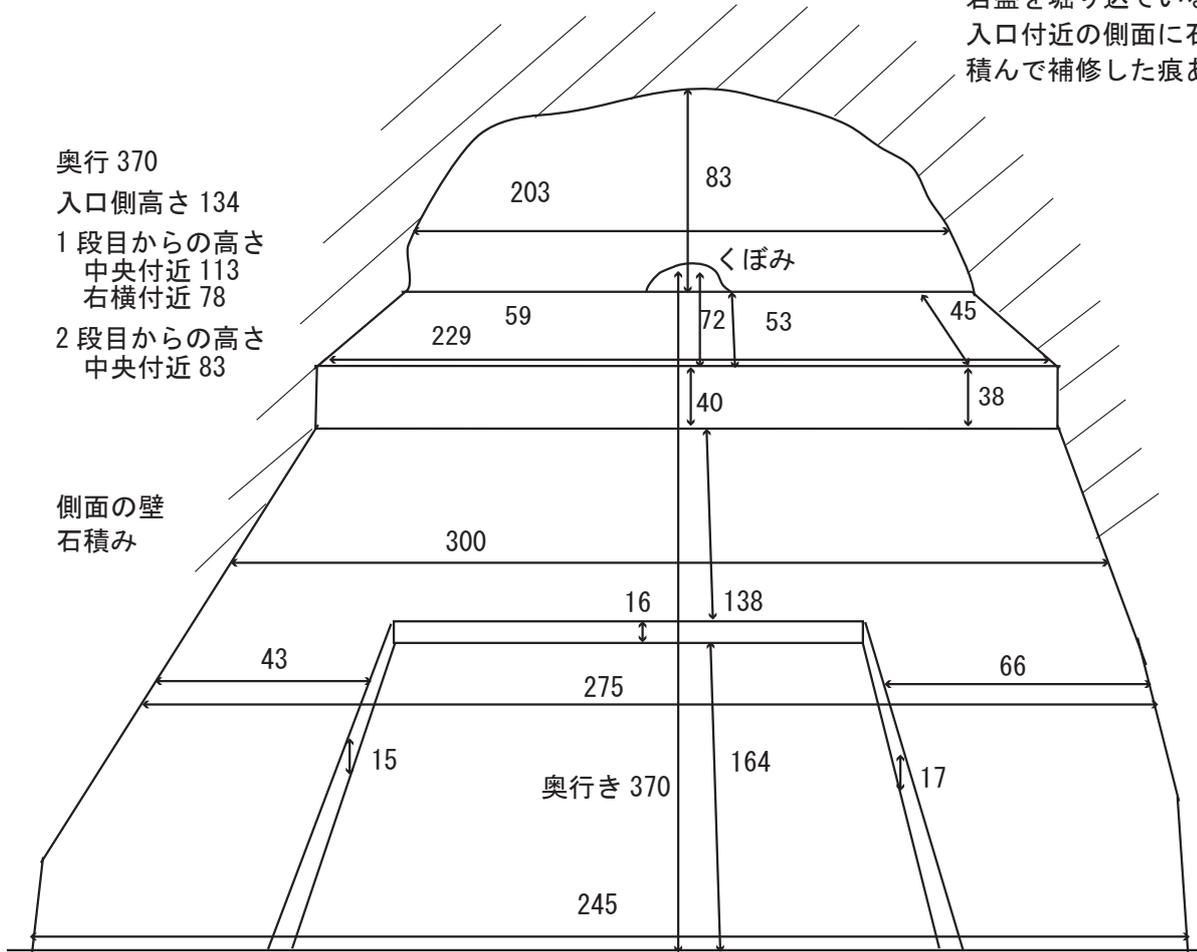


図1 項氏砂辺家の墓の簡略図（全体図） 単位：cm

【墓A】墓室内簡略図

堀込墓

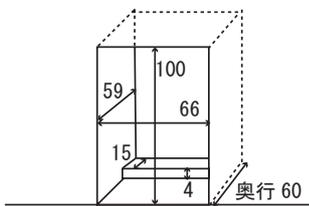
岩盤を掘り込んでいる。
入口付近の側面に石を
積んで補修した痕あり。



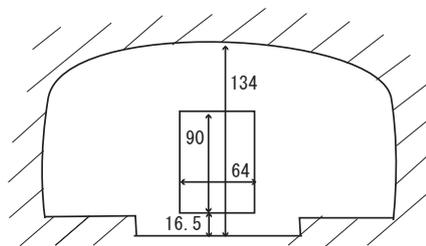
奥行き 370
入口側高さ 134
1段目からの高さ
中央付近 113
右横付近 78
2段目からの高さ
中央付近 83

側面の壁
石積み

【外側からみた墓口】



【内側からみた入口側】



【厨子龕の配置】

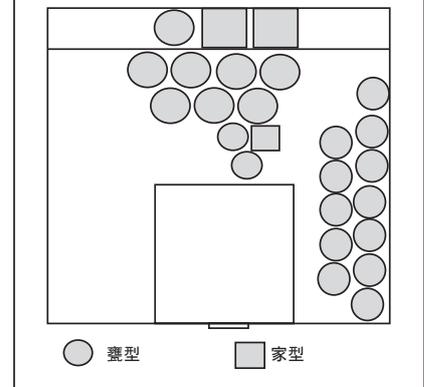
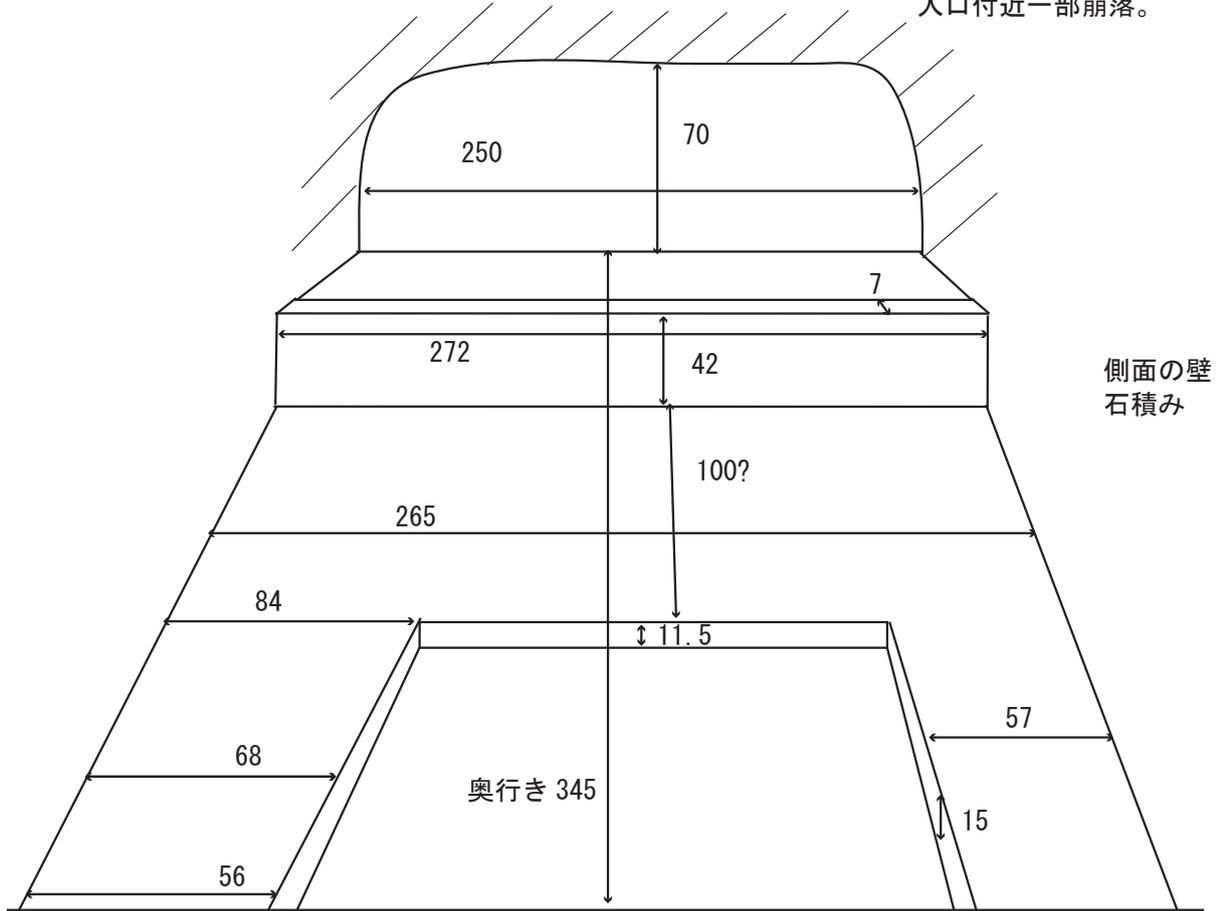


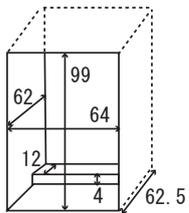
図2 項氏砂辺家の墓の墓室内簡略図（墓A） 単位：cm

【墓B】墓室内簡略図

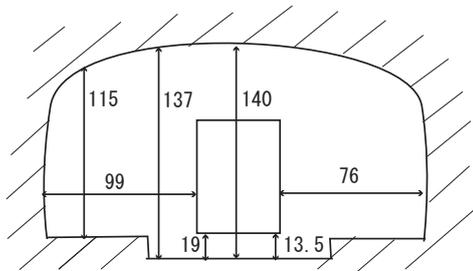
堀込墓
 岩盤を掘り込んでいる。
 入口付近一部崩落。



【外側からみた墓口】



【内側からみた墓口側】



【厨子甕の配置】

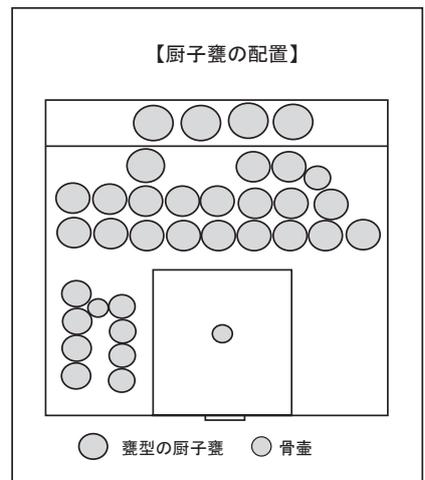


図3 項氏砂辺家の墓の墓室内簡略図（墓B） 単位：cm

実際に厨子の銘書を読み、これを家譜等と照合してみると、初代松香の厨子甕は墓Bに位置するなど、疑問に残る点もある。これについては、現在のところ検証が終わっていないので、本稿では言及しないが、いずれかの機会に、砂辺門中の系譜と墓との関係は解き明かされるであろう。現に、砂辺松博氏は、同家の家譜を読み込んで、ご自身のルーツを探究するとともに、砂辺門中の中で学習の機会を作るなど、非常に意欲的に研究に取り組んでおられる。

したがって、博物館としても今後砂辺氏と情報を共有した上で、この墓の成り立ちや被葬者の情報等を探っていきたいと思う。

4 寄贈された石厨子

当館では、厨子甕の保管スペースが非常に限られてきたため、現在は寄贈の申込みがあっても全ての厨子を受け入れることはできなくなっている。そこで、事前に調査した中から時代的にも古く、資料として活用できるものを集めている。今回、墓Aの奥に並んでいた2基の石厨子もその類に入る珍しいものである。

①「隆武六年銘入り 石厨子」

厨子の身の前面に「歸眞 宋□禅定門霊位／隆武六年庚辰四月六日」という文字が刻まれ、朱が塗られている。被葬者は宋□禅定門であり、17世紀中頃に亡くなったものと思われる。ここに記されている「隆武六年」は、隆武年間が二年で終わっているので、実在しない年号である。隆武元年は1645年にあたり、そのまま数えると隆武六年は1650年ということになる。しかし、1650年の干支は庚寅であり一致しない。これに近い年号で庚辰の年は1640年であるが、いずれにしても年号について確証はない。

このほか、この厨子の身の正面には日輪が線彫りされ朱が塗られている。また、蓋の上部には「久米村」という文字を円で囲んだ線彫りが見られる。さらに、副葬品の一部が残っていたのか、翡翠のような小さな玉4個が中から見つかった。これらをX線で調べて貰った結果、ガラス製であった。この石厨子の素材はサンゴである。



写真7 石厨子①（正面に銘書がみえる）

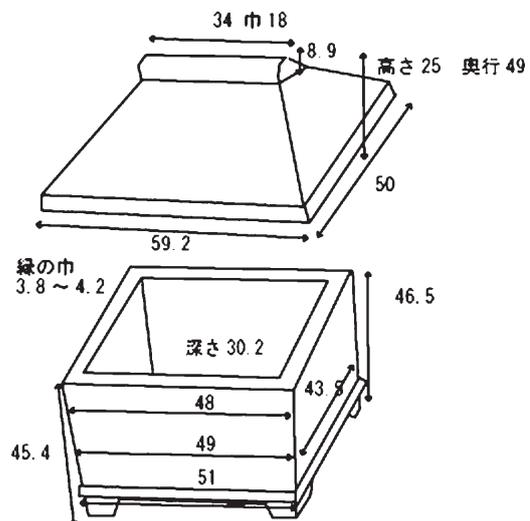


図4 石厨子① 法量

②「康熙二十八年銘入り 石厨子」

厨子の身の表面、側面に梵字が記されている珍しい厨子である。身の前面に「康熙二十八年／□心華妙蓮禅定尼／己巳二月初四日去」とあり、中心に梵字が見られる。左右側面にも梵字があり、蓋上部にも梵字が見られるが、内容は不明である。被葬者は心華妙蓮禅定尼で、康熙二十八年（1689年）に没したと思われる。この厨子の材質は砂質の石灰岩である。

以上、簡単ではあるが、砂辺門中の墓の報告を試みた。砂辺家には、家譜や古文書が幾つか残っているほか、本家に伝わる位牌等からも詳しく分析する



写真8 石厨子②（正面や側面、蓋に梵字あり）

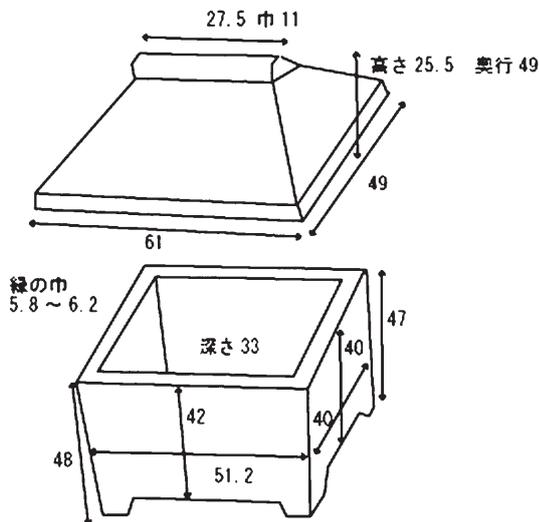


図2 石厨子② 法量

ことができる。引き続き、砂辺氏らと協力して那覇市の旧家である砂辺家の墓や葬制について調べていきたい。

おわりに

現在も進められている那覇市の都市計画と墓地移転の問題は、那覇市内にある古墓が失われていく契

機になっている。筆者は、できる限りこうした墓の移転に立ち合い、記録できる部分は写真や映像等で残していきたいと考えている。

墓の移転に伴い、厨子甕に納められていた遺骨は1体ずつ火葬にされ、新しい墓に納められていく。その際、厨子は割られて墓室内に敷き詰められ、その土地に返されているという。

今回報告した牧志南公園の土地は、市内の中心部にあり、一步外に出ると観光客らが行き来する賑やかな街である。墓地は、そうした商業施設と隣接するので不釣り合いではあるが、一方で昔の那覇の地形を知る上では重要なものであるように思う。

今回、この墓について報告するにあたり、さらに詳しい分析を試みたが、言及するまでには至らなかった。結果的に、稚拙な図面等で、測定の専門家等からすると参考にはならないかも知れないと思う。しかし、墓の移転という重要な場面に立ち合わせていただき、さらには測量までさせていただいたので、その記録を残したいと思い、あえて報告することにした。

先述の通り、これから家譜をはじめとする史料等をもとに、項氏の辿ってきた歴史や人物等を探りながら、この墓の被葬者との関係や、ここに移ってきた時代背景等にも着目していきたい。

末筆ながら、墓の調査から資料の提供まで、多大な協力をいただいた砂辺松博氏と砂辺松五郎氏、ほか砂辺門中の皆様に心より感謝申し上げる次第である。

また、墓の調査において田名館長と鈴木学芸員にはいろいろとご教示いただき、墓の測量においては、大底ひろみ氏にご協力いただいた。あわせて御礼申し上げます。

参考資料

- ・ 那覇市都市公園整備推進計画のホームページ
<http://www.city.naha.okinawa.jp/cms/kakuka/hanamidori/seibichuu/H27-31sanko>
- ・ 那覇市2010『那覇市墓地等に関する基本方針』